

### 〈討論要旨〉

岩本報告が、「関係論的共同体論」という規定（岩本共同体論への小谷汪之の規定）を自ら戦略的に引き受けて展開されたことから、討論は、鳥越会員からの「関係論とは何か」という問いで口火が切られた。岩本会員の批判する「所有論共同体論」も関係論の一つであるとするれば、「所有」以外のいかなる契機（独立変数）が積極的に打ち出されるのかという問いによって、労働組織、人と人・人と土地の繋がり、そしてそこでの労働の無償無限の交換（労働と労働、労働と保護の交換）関係への岩本会員の着目が確認された。しかし、労働組織の基本になお土地所有があるとすれる岩本会員の見解に対しては、労働組織を人と土地を繋ぐ媒体であり中間的・過渡的であるとする磯辺会員より、共同体を労働組織でおさえる場合の不安定さが指摘された。

続いて提出された、労働組織の在り方によって前近代と近代を分かち場合のメルクマールを問う高山会員の質問は、共同労働の個別労働への解消を想定したものであったが、この点に関しては、共同体外部の商品経済の内部浸透が「手伝い」という無限労働を有償有

限労働へ解消すること（労働力商品化）にメルマールが求められた。また、農民的土地所有の成立によって近世を共同体解体期とする岩本会員の見解について、その内容を問う有馬・松田両会員の質問により、本百姓（イエ）による土地処分（質入れ、売買）のみならず、水呑み層の商品経済との接触機械の増大が論拠として説明された。

共同体における人と人の繋がり、の独自性をイエ相互間、オヤーク間の労働力の無償交換に求める場合、他方で、人と土地の繋がりにおける自然諸力の無償性さらにはこの無償性の維持に関わる労働、人と人の繋がりという観点、きょうの環境問題との関連で筆者にとっては重要に思われる。この点で、「文化の総合体としての、制度・規範の形成体としてのムラ（共同体）」（長谷川会員の発言より）がその外部（他の共同体あるいは都市生活者の制度・規範）をいかに組み込みうるのか、といった問題意識を新たにする討論であった。

（文責 大森正之）